

中世末期の妖術師像
——『蟻塚』から『鉄鎚』へ——

菊地英里香

はじめに

一般にヨーロッパで魔女狩りの嵐が吹き荒れたのは、ルネサンス期から近代初頭、すなわち 16～17 世紀のことである。この時代にあつて、魔女狩りを推し進めようとした、あるいはそれを阻止しようとした双方の知識人たちにとって、絶大な影響力を与えたと考えられる書物が『魔女たちへの鉄鎚』*Malleus Maleficarum*¹(1486 年)である。著者はヤーコプ・シュプレンガー(1436/38 年－1495 年)とハインリッヒ・インスティトーリス(1430 年頃－1505 年)という 2 人のドミニコ会士である。

彼らは、本書の巻頭に教皇インノケンティウス 8 世の「魔女狩り要望書」を掲げ、典型的なスコラ学的手法(まず問題提起をし、続いて異論を展開したうえで、著者の解答と重なる反対異論を導入し、主文を示す)を用いて魔女狩りの正当性を弁証している。構成はドミニコ会の巨星であるトマス・アクィナスの『神学大全』にならって、3 部構成をとり、第 2 部のみがさらに 2 つに分かれている。内容を簡単に紹介すると、第 1 部ではスコラ的手法を用いて、妖術師(『鉄鎚』においてはもっぱら女性、女性の妖術師＝魔女である)の術の実現にかかわる 3 つの存在である悪魔、妖術師、神の許しがどのようなものであるかを論じ、第 2 部では前半で妖術師の術による悪行の実態について、後半ではそれらへの治療や予防法について述べ、第 3 部ではスペインのドミニコ会士であるニコラウ・エイメリコ(1320 年－1399 年)の

¹テキストとして使用したのは、Henry Institoris et Jaques Sprenger, *Le marteau des sorcières. Malleus Maleficarum*, 1486 (trad. du latin par Amand Danet), Paris, 1973 ; Grenoble, 1990(rééd). 英訳も参考にした。 *The Malleus Maleficarum of Heinrich Kramer and James Sprenger*, Translated with Introductions, Bibliography and Notes by Rev. Montague Summers, London, 1928, New York, Dover Publications, INC, 1971.

『異端審問の手引き』 *Directorium Inquisitorium*² (1376年) に大いに依拠しながら、実践的な裁判の手続きを扱っている。

ミシュレも『フランス史』第7巻の序説の中で「術学的な書物であり、トマス主義者によって用いられた分割と再分割が愚かしく模倣されている」³と評していたが、確かに『鉄鎚』は「末期スコラの魔女学」⁴としての特徴を存分に有している。だが、「煩瑣哲学」の産物のひとつとしてのみ本書を片づけてしまうことはできないように思われる。博学な神学者であるシュプレンガーたちは、聖書をはじめ、トマスやアウグスティヌスの著作、さらには教会法やローマ法に精通しており、自らの主張に沿ってこれらの権威を怒濤の勢いで繰り出してくる。とはいえ、権威が何と云っていようが、自分たちの感覚や経験に基づいた判断を先行させる場合もある。『鉄鎚』の包括的な研究を行ったH・P・ブローデルが述べているように、彼らはいわゆる「中世スコラ哲学者」の一般的なイメージにそぐわない一面も有しているのである⁵。彼らは異端審問官としての自らの経験はもちろんのこと、見聞きして得た情報をもとに理論の構築を行っていたと考えられる。

そこでまず取り上げたいのが、ドミニコ会の先達ヨハン・ニーダー (1380頃-1438年) の『蟻塚』 *Formicarius*⁶ (1436-37年) である。ニーダーは名指しされる場合もそうでない場合もあるが、『鉄鎚』の中に頻繁に現れる権威であり⁷、『蟻塚』はシュプレンガーたちによる妖術師のイメージの形成に多大な影響を与えている。『蟻塚』の記述から妖術師とその悪行についての

²Nicolau Eymerich, Francisco Peña, *Le manuel des inquisiteurs*, introduction, traduction, et notes de Louis Sala-Molins, Paris, La Haye, 1973 ; Paris, 2001 (rééd). ラテン語の初版は、1376年にアヴィニオンで出版された。上掲書は1578年ローマで出版された (教会法とローマ法の博士であるペニャの注釈付き) の仏訳である。

³J・ミシュレ『フランス史Ⅲ』大野一道, 立川孝一監修, 藤原書店, 2010年, p.70 (原著 *Histoire de France* は1855年に出版された)。

⁴平野隆文が著書『魔女の法廷』(岩波書店, 2004年)において、『鉄鎚』を分析した1章に付したタイトルである。

⁵Hans Peter Broedel, *The Malleus Maleficarum and the construction of witchcraft*, Manchester and New York, Manchester University Press, 2003, p.95.

⁶テキストとしたのは、以下の第5巻の羅仏対訳である。Jean Nider, *Des sorciers et leurs tromperies*, *La Fourmilière*, livre V, texte établi et traduit par Jean Céard, Grenoble, Edition Jérôme Millon, 2005.

⁷Amand Danet, « L'inquisiteur et ses sorcières », *Le marteau des sorcières. Malleus Maleficarum*, 1486 (trad. du latin par Amand Danet), Paris, 1973 ; Grenoble, p.116.

当時の実情を探りながら、『蟻塚』から『鉄鎚』に継承されたもの、そうではないものについて検討していくことにする。それから、シュプレンガーたちがより強いこだわりを見せている「妖術師と悪魔の契約」、「妖術師と悪魔の肉体的結合」というテーマについての解釈を通して、妖術師の罪がいかなるものであり、なぜ彼女たちを焼き尽くすのが必然とされたのかを考察する。これらの作業を通して、『鉄鎚』の特性を明らかにしたい。

『蟻塚』における妖術師は、伝統的なマレフィキウム（妖術による害悪）を行う者たちとしてとらえられており、悪魔と妖術師との関連性よりは妖術師たちがもたらす実害に焦点が当てられている。これが『鉄鎚』に至ると、妖術師たちには悪魔と結託した異端者という烙印が押されることになる。異端者として認識されるようになるというのは、確かに新たな段階である。だが、この点だけを強調すると時代を逆戻りしてしまうことになる。実害をもたらす世俗の犯罪者という基盤が確立され、そこに宗教的な罪人という要素が加えられたからこそ、妖術師の罪がより重大なものとして認識されるようになったのだと筆者は考える。

1 『鉄鎚』の源泉としての『蟻塚』

1.1 『蟻塚』について

ドミニコ会修道士であり神学博士のヨハン・ニーダーは、1435年から37年にかけて公会議のために訪れていたバーゼルで『蟻塚』を執筆した。『蟻塚』は全5巻からなる会話体の著作であり、「怠け者」の質問に「神学者」が答える形で論述が進められる。おそらくニーダー自身である「神学者」は、中世の動物寓話の伝統を踏まえながら、人間の美德と悪徳を蟻の行動と比較し、人間の正しい在り方を説く。第1巻と第2巻は善行と啓示、第3巻は虚偽と悪行、第4巻は高德な人々の行いをテーマとする。そして、最後の第5巻は、迷信、魔術、悪魔崇拝に関する記述の宝庫となっている。本稿の分析対象は、この第5巻である。

ラテン語で書かれた同書は、説教すべき立場にある聖職者たち、特にドミニコ会士たち向けに書かれたものである。当時、ラテンキリスト教世界は、ペストや飢饉、度重なる反乱やオスマンの脅威により外側から苦しめられる一方で、ロラード派、フス派、フランチェスコ会心霊派ら異端者たちによって内側からも蝕まれるという憂患にもとらわれていた。ニーダーは説教の中で、異端者たちを偽隠者、偽善の恍惚者、偽予言者などと非難する一方で、規律の緩んだドミニコ会自体、さらには教会やキリスト教世界全体の改革の必要性を感じていた。ニーダーの主張を代弁する「神学者」は「蟻塚（教会）から出ていく蟻たち（異端者）は熊に食われる」、「己の家に留まれ」⁸と警鐘を鳴らす。

このようなニーダーの意識は、『蟻塚』の序文にも反映されている。ドイツの様々な地域を巡回していた際に、著者は不信心な者たちが「かつて様々な啓示によってそうしたように、神はなぜキリスト教徒たちの間で奇跡によって教会をより強固なものとししないのか、よく生きるために信仰と徳を支えるために神は光を当ててくれないのか」と不平をもらすのを耳にした。これらの不満をなだめるために、ニーダーは近い過去やまさに同時代に生じた様々な啓示や高德な人々の行いを記すことにしたと述べている⁹。神からの啓示は超自然のものであるが、超自然の領域に属しているかのように見えるすべての現象が神の奇跡を表明しているわけではない。なぜなら、それらの中には悪魔の介入によるものや自然的な原因がもとで起こるものもあるからだ。そして、悪魔と結託して己の欲望を満たそうとするのが、妖術師 *maleficus* や魔術師 *magicien* たちである¹⁰。ニーダーはこれらについても論じている。

⁸ Sophie Houdard, « Des formis et des hommes », *Des sorciers et leurs tromperies, La Fourmilière, livre V*, texte établi et traduit par Jean Céard, Grenoble, Edition Jérôme Millon, 2005, p.10.

⁹ Jean Nider, *op.cit.*, pp.54-57.

¹⁰ *maleficus* は男性形であり、文字通り訳せば「悪行を行う者」である。呪いや魔法を用いる民間の「魔女」を指す用語の1つである。*malefica* はその女性形である。*magicien* は、専門の知識や儀礼が必要とされる高等魔術の実践者である。前者を男女含めて「妖術師」と訳し、後者は「魔術師」と訳すことにした。以下で登場する *nigromanticus* 「降霊術師」は、後者に属する。

1.2 『蟻塚』における妖術師像

「妖術師たちとその罫について」 *de maleficis et eorundem deceptionibus* と題された第5巻で描かれているテーマを一瞥すると、伝統的な妖術のイメージが並置されていることがすぐに了解される¹¹。これらのテーマは、2つの方向から照射されている。1つめは、聖書や教父の教示の中に現れる悪魔の力とそれに対抗するための手段にかかわるものであり、2つめは、3人の情報提供者（世俗の裁判官であるペーター・フォン・グライエルツ、ベネディクトという名前のウィーンの修道士、そしてオータンの異端審問官¹²）からの話を軸とした同時代の悪魔や妖術にかかわるものである。後者の具体的事例が前者の権威によって裏付けを得るという構図がここに見出される。

ニーダーの妖術師像をここでまとめておくことにする。『蟻塚』において悪魔と結びつく者たちには、大きく分けて2つのタイプがある。ニーダーは「徳という羽をもたない、あるいは自分の家、すなわちカトリック教会の境界を不用意に超えすぎ、そのために不敬神に落ちるこのような者は熊に食われる。これらの者たち[のたとえ]によって妖術師 *malefici* と降霊術師 *nigromantici* は理解される」と述べている。不敬神な点では共通な両者の違いは何であろうか。まずは妖術師 *maleficus* たちから見ていこう。

「すなわち、悪行を働く者、あるいは信仰において悪しくとどまっているような者が妖術師 *maleficus* と呼ばれるが、近隣の者たちを迷信や術を用いて害する妖術師 *maleficus* においてこの両方が十分見出される」¹³と「神学者」は述べる。明記はされていないが、信仰において悪しく留まる者とは異端のことであるので、異端であり実際にこの世で他人に危害を加える犯罪者でも

¹¹ Nicole Jaques-Lefèvre, « Parole(s), Histoire(s), Doctrine(s) : La singularité textuelle du *Formicarius* », dans Jean Nider, *Des sorciers et leurs tromperies, La Fourmilière, livre V*, texte établi et traduit par Jean Céard, Grenoble, Edition Jérôme Millon, 2005, p.43.

¹² この3人が実在を史料から確認することはできない。だが、たとえ架空の人物であったとしても、その具体的な素性と真実味を帯びた「語り」が同書の中で重要な役割を果たしていることには変わりはない。この点に関しては以下を参照。Nicole Jaques-Lefèvre, *op.cit.*, pp.33-34.

¹³ Jean Nider, *op.cit.*, pp.90-91.

あるというイメージがニーダーの中にあったと言える。このような妖術師たちは、神の許しの下で以下の7つの方法で人間に害をもたらすとされている。①邪な愛を喚起する、②憎しみや嫉妬の種をまく、③生殖能力を奪う、④四肢の一部を損なう、⑤命を奪う、⑥理性を奪う、⑦上記の方法を用いて人の財産や家畜を奪う。そして、これらの悪行は妖術師たちの手により即時に起こるのではなく、言葉や儀礼や何らかの行為により、いわば悪魔と結ばれた最初の契約によって（*per pacta initia cum demonibus*）起こる。すなわち、悪行を実際に成就させているのは悪魔なのである¹⁴。

他方の、いわば高等魔術師の系譜にある降霊術師 *nigromanticus* たちは以下のような者たちだとされている。

まさしく降霊術師と呼ばれるのは、迷信的な儀式によって秘密を明らかにするため地面から死者を起き上がらせることができると言われている者たちのことである。かつてピュティアの巫女がサムエルの求めに応じてサウルを地から起き上がらせようと望んでいたようなことだ。『列王記』第1章、第28節において¹⁵。さらには魔術師シモンのような者である。この忌まわしい男は使徒の首位の座を占めようとして、死者を生き返らせたように見せかけた¹⁶。たが、役に立つ適用であっても、儀礼的な悪霊との契約によって未来を予言する、あるいは悪霊の秘密のお告げにより無くし物を見つける、あるいは悪事によって隣人を害する者を降霊術師と呼ぶ¹⁷。

最後の「隣人を害する者」という点では初めの妖術師 *maleficus* と重なるが、ここに描かれている儀式的魔術を行う者たちは、悪霊を呪文で呼び出し、悪霊たちに従うよりは命令する知識人の魔術師たちの系列に属していると考えられる。儀礼的魔術においては、魔術師は悪魔の手下などではなくむしろ

¹⁴*id.*

¹⁵ ニーダーの記憶違いであろうか、この話は『サムエル記 上』第28章。

¹⁶ この逸話については、以下を参照。Jacques de Voragine, *La Légende dorée*, préface de Jacques Le Goff, Editoin Gallimard, 2004, pp.453-454.

¹⁷ Jean Nider, *op.cit.*, pp.100-101.

る敬神の者であり、神聖な言葉や神の名への信仰をもち、これらの力によって悪霊たちを服従させることができると考えられていた。自分自身や他者のために悪霊と接触して魔術師が獲得しようとする利益は、ほとんど他の人間に危害を加えることとは無関係であった。だが、彼らの用いる呪文や儀礼がカトリックの教義から見て迷信的、さらには異端的であるとみなされるようになったのである¹⁸。

ニーダーはこれらの2つのタイプの妖術師を区別しているが、どちらがより悪であるというような比較はしない（『鉄鎚』では前者のほうがより罪深いとされるのだが、この点は後述する）。民間の妖術師（maleficus）と知識人の魔術師（ここでのnecromanticus）は、悪魔と関わり何がしかの行為を成し遂げるという点においては共通であるため、かなり混同される場合もあるが、ある程度別のもので以後の悪魔学においてもあらわれてくることになる¹⁹。

1.3 個か宗派か——スカヴィウス、ホッポ、シュタデリン

『蟻塚』の第5章の中で、圧倒的な存在感を放っているスカヴィウス、ホッポ、シュタデリンという3人の妖術師がいる。スカヴィウスはホッポの師匠であり、ホッポはシュタデリンの師匠である。すなわち、3人は師弟関係にある妖術師である。この3人にまつわる話はベルンのペーター判事からもたらされたものである。彼らは、基本的には民衆世界の妖術師のタイプに属していると考えられるが、ノーマン・コーンも指摘するように²⁰、供述には伝統的な民間魔術と儀式魔術の混在がみられる。彼らの告白した所業は『蟻

¹⁸ この点に関しては以下を参照。ノーマン・コーン『魔女狩りの社会史』山本通訳、岩波書店、1983年、pp.221-234。

¹⁹ 魔女狩りに反対した医師ヨハン・ヴァイアーは、聖書の中で「生かしておくな」と命じられているのは、民衆の妖術師（メランコリーの老婆が多い）ではなく、知識人の魔術師たちのほうだと主張した。（拙稿「J・ヴァイアー『悪魔の眩惑』——魔女は罪人か、病人か？」『古典古代学』、創刊号、筑波大学大学院人文科学研究科古典古代学研究室、2009、pp.29-51を参照）。

²⁰ ノーマン・コーン、前掲書、p.277。

塚』の他の個所で妖術師に帰されている悪行と共に、『鉄鎚』において継承されることになる。ここで3人の悪行についての報告をまとめておくことにする。

本章の第4節において、ベルン周辺においては60年ほど前から人々が悪しき業*maleficium*を行っており、それを最初に始めたのがスカヴィウスだとピーター判事は語る。彼は大っぴらに自分の能力を誇り、望めばいつでもネズミに変身でき、敵から逃れることができると言っていた。実際そのようにしてしばしば敵から逃れていたのだが、あるとき神の裁きによって宿屋の窓から侵入した敵たちに剣と槍で突き刺されて悪事の報いを受けた²¹。

彼の弟子であるホッポとホッポの弟子であるシュタデリンは、スカヴィウスの術を受け継いで、悪行の限りをつくしていた。彼らは好きな時にはいつでも、誰の目に留まることもなく、たい肥や干し草や小麦を隣人の畑から自分たちの畑に移動することができた。また、激しい雹や稲妻を伴う突風を起こした。人々の知らぬ間に、親の目の前で岸を歩く子供を水の中に突き落とした。人間や家畜を不妊にした。隣人たちの財産や身体に損害を与えた。人がまさに馬に乗ろうとした瞬間に馬を暴れさせた。空中を飛んでどこへでも行くことができた。つかまりそうな時には胸のむかつくような悪臭を発したので、彼らを捕らえた者たちは、手や心臓が激しく震えた。彼らは隠されたものを暴露し、これから起こるべき事柄を予言した。目の前にないものを存在するもののように見た。望み通りに人々を雷で打ち、殺した。その外にも多数の災いを神の正義が許す場所でしかるべき時におこなった。

これらの悪行がどのように行われていたのかピーター判事は疑問に思った。以下は雹や嵐をどのように起こしたかという彼からの問いへのシュタデリンの答えである。他の個所でシュタデリンは拷問を受けて告白したと明記してあるので²²、この部分も拷問下での答えだと考えられる。「畑の中である言葉を発しながら、悪霊の中の首領に我々が望むものを打つためにその配下の者をひとり送るようにとまず祈願する。それからその悪霊が来ると、我々は黒いひな鳥を空中高く投げながら、四辻で犠牲に捧げる。悪霊はそれ

²¹ Jean Nider, *op.cit.*, pp.102-103.

²² *ibid.*, pp.92-93.

をつかみ、命令に従い風を起し雹や嵐を生じさせるが、その場所は常に我々が指定した場所というわけではなく、生きておられる神の許しに従った場所で起こる」²³。

前述したように、3人は師弟関係にある。そこから、彼らが崇^{ホウ}派をなしていたのではないかという推測も生じるのだが、私はN・ジャック＝ルフェーヴルの言うように、これはむしろ個人的な技の継承であると考え²⁴。民間の妖術の伝統では、今日でもそうであるように、1人の妖術師がその秘儀を伝達すると考えられている。ここで注目したいのは、伝承されている悪行が気象異常や隣人や家畜への害などの伝統的なマレフィキウムであるという点である。ここでは悪魔の存在感はまったくというほど感じられない。シュタデリンの供述の中には悪霊が頻出するが、これは拷問を受けてのものなので、裁判官の誘導が働いていたと大いに考えられる。また、一代目のスカヴィウスから三代目のシュタデリンの間には60年という時間が流れている。この間に妖術師と悪魔との結びつきが深められていった（当然、抑圧しようとする者たちの頭の中で）とも考えられる。

スカヴィウスは、敵たちに殺された。敵たちの素性はわからないが、少なくとも異端審問官ではない。おそらく同じ民衆世界に属する者たちの悪意か復讐によるものではなかっただろうか。マレフィキウムに対する民間でのリンチというものは、キリスト教以前から行われ、中世では散発する現象であった。シュタデリンは拷問のもとで自供し火刑に処されたが、これは中世末期以降多くの妖術師たちのたどる道となる。

3人の妖術師たちが宗派を形成していたと断言すべきではないと考えるもう一つの理由として、彼らがサバトに行っていないということが挙げられる。そもそも、魔女大迫害の時代に見られたような、「サバト」が『蟻塚』においては不完全な形でしか存在しない。不完全というよりは、サバトらしきものの萌芽が見られるだけにとどまっているといったほうが良いだろう。サバトとはどのようなものであるか、ギンズブルグは以下のようにその基本的要素を描写している。

²³ *ibid.*, pp.108-109.

²⁴ Nicole Jaques-Lefèvre, *op.cit.*, p.40.

夜になると、魔女や魔術師が、田野や山中の、普通は人気のない場所に集まる。彼らはしばしば、体に軟膏を塗って、棒や箒の柄にまたがり、飛んでやってくる。だが時には動物の背に乗ったり、動物に変身したりして現れる。集会に初めてやって来たものは、キリスト教信仰を捨て、秘蹟を冒瀆し、人間の姿をしているか、あるいは（こちらのほうが頻度が高いのだが）動物、半動物の格好をしている悪魔に敬意を表さなければならない。それに引き続いて宴会を催し、踊り、性的乱行にふける。魔女や魔術師たちは家に帰る前に、子供の脂肪と他の材料で作られた、妖術の軟膏を受けとる。²⁵

『蟻塚』第5巻におけるサバトラしきものは、ペーター判事が妖術師から採取した2つの話の中に存在する²⁶。1つめの話の中では、妖術師たちは未洗礼のあるいは洗礼が済んでいても十字架によって守られていない幼児を殺害し、その肉片を大釜で煮詰めて、妖術や変身のために用いる軟膏を作る。また、この液体は瓶に詰められる。そして特別な儀式においてこれを飲んだものは、彼らの宗派の長となると言われている。以下の2つめの話は、妻とともに火あぶりにされた男が情報源である。

以下が、自分が引き入れられることになった儀式です。はじめに、日曜日に水が聖別される前に、弟子になるべき者は指導者たちと教会へ行き、その前でキリストと彼へ信仰、洗礼、そして普遍の（カトリック）教会を否定しなければなりません。それから、マギステルルス、あるいは小さな先生（悪霊がこう呼ばれているのです）に敬意を表さなければなりません。そして先述したような液体を飲むとすぐさま、彼は自分の頭の中に妖術のイメージやこの宗派の主要な儀式が形成され保たれるのです。

²⁵ カルロ・ギンズブルグ『闇の歴史』竹川博英訳、せりか書房、1992、p.7.

²⁶ Jean Nider, *op.cit.*, pp.94-97.

このように、幼児殺し、軟膏作り、キリスト教の否定、悪魔への崇拜といったサバトの要素が現れており、宗派 *secte* という言葉も使われている。もし、スカヴィウスらが宗派をなしていたのなら、このような集会についての供述が彼らからも引き出されていしかるべきなのでないだろうか。『蟻塚』から見えてくるのはむしろ個の存在としての妖術師なのである。3人の妖術師たちは、村の伝統的な呪術師のイメージを色濃く持っている。彼らは民衆世界で日常的に起こるさまざまな害悪（天候や人畜への被害が中心）を引き起こす一人一人の自立した存在であり、これが『蟻塚』の妖術師像の本質である。

『蟻塚』において描写されている悪魔との儀礼的なかかわりという新たな要素は、のちの「サバト」の萌芽、あるいは断片的なものにとどまっている。このサバトの不完全さは、『鉄鎚』にも継承されていく。『鉄鎚』がサバトらしきものについて語っているのは、一か所だけである。しかも、上で引用した『蟻塚』からの事例がそっくりそのまま収録されているにすぎない。だが、この点が『鉄鎚』のほころびとなっているとは言えまい。なぜなら、サバトという場なしでも、妖術師（女）と悪魔を固く結びつけることは十分可能だったからである。

2 『魔女たちへの鉄鎚』の射程

2.1 聖俗の犯罪者としての妖術師

シュプレンガーらは、妖術師たちとは次のような者たちであると言う。

「[...] 妖術師たちは、契約によって悪魔と結びついてその助力を得て、神の許しの下で実際に呪いによる効果を引き起こす力を持っている²⁷」。このとらえ方は、先のニーダーによって示されたものとほぼ同じである。また、妖術師たちが行っているとされた悪行に関しても、概ね『鉄鎚』は『蟻塚』を踏襲していることがわかる。例えば、生殖行為の妨害、動物を人間に変え

²⁷ Henry Institoris et Jaques Sprenger, *op.cit.*, p.121.

る、赤子の命を奪い悪魔に捧げる、嵐や雹などを起こす...²⁸等である。

もつとも、このような妖術師たちの悪行に対する告発の声は、いつの時代にもあった。妖術師の弾圧のもっとも古い例は紀元前 1200 年のエジプトにあり、ギリシャではデモステネスの時代（紀元前 4 世紀）に 1 人の妖術師が処刑されており、ローマではネロやカラカラ帝により厳しく弾圧され、キリスト教に改宗した直後のコンスタンティヌス帝（紀元 9 世紀）も呪術を禁ずる厳しい法令を發布していた。とはいえ、これらの弾圧や迫害は散発的なものであり、教会の態度も冷静で寛容なものだった²⁹。

それゆえ、神学も 13 世紀の終わりごろまでは、悪霊どもに強い関心を示すことはなかった。サタンとその失墜については、悪、予定、神の摂理の問題と結び付けられて考察の対象となることがあったが、神学が主たる関心の対象としていたのは、神と人間だったからである³⁰。

この態度にやや変化が生じたのは 1270 年ごろからである。トマス・アクィナスは『悪について』*De malo*（1272 年）において、悪霊の性質や能力、人間に及ぼす力などについて考察を行った。トマスは、悪霊の力を借りた人間による魔術の実践についても語っている。チャールズ・エドワード・ホプキンの研究が明らかにしたように³¹、トマスにとって魔術とは、ほぼ儀礼的魔術、あるいは高等魔術をさしている。彼ら魔術師は、式文や道具を用いて悪霊を呪文で呼び出し、悪霊が現れると彼らに命令を下す。彼らは悪霊に身も心も捧げたりはしないし、肉体的に交わったりもしない。また、魔術師たちが悪霊から望んだこととは、おもに未来を知ることであった。

つまりトマスの時点では、のちに妖術師に着せられた悪行は問題になってはいない。無論、悪霊と取引をして未来を予言しようとする行為は罪深いものだとされている。トマスは、悪霊から助力を受ける人間は誰でも、その悪霊と契約を結ぶことになるのだとも述べている。その契約が明示（人間が悪

²⁸ これらの諸行為に関しては以下が詳しい。清末尊大「最初の魔女狩り全書『魔女に下す鉄鎚 *Malleus Malefiarum*』の研究（2・完）」北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）第 49 巻第 2 号, 1999, pp.20-24.

²⁹ 森島恒雄『魔女狩り』岩波書店, 1970, pp.12-18.

³⁰ Alain Boureau, *Satan hérétique*, Paris, Odile Jacob, 2004, p.127.

³¹ Charles Edward Hopkin, *The Share of Thomas Aquinas in the Growth of the Witchcraft Delusion*, Philadelphia, 1940.

霊を呪文で呼び出す場合)であろうと暗黙であろうとも、悪霊と通じようとした者たちは背教者とされた³²。

「悪魔と人間の契約」については、アウグステゥヌスも語っており（『キリスト教の教え』Ⅱ、20-24）、6世紀のテオフィルスの物語³³などにも見られる要素である³⁴。しかし、これらの古くからのモチーフが魔術的行為と結び付けられるようになった点は、注目に値する。そしてトマスの時点では、儀礼的魔術を行う者（エリート of 魔術師）たちに関連して出てきたものだった。これが、『鉄鎚』に至ると、民間の妖術師たちの妖術を可能にする大前提として強調されるようになり、トマスは権威としてもちだされることになる。

人間が悪魔と契約することにより助力を得て、願いをかなえることが可能となるという見解は『蟻塚』においても見られる。しかし、『鉄鎚』においてはあらたな解釈が加えられている。それは、人間（シュプレンガーたちによっては大多数が女性）が悪魔と契約をする際に自らの意志によって文字通り「身も心も捧げる」という点にある。この点については後で詳しく論じるが、このことのために、妖術師たちには異端者や背教者が受けるべき罰よりも重い罰がふさわしいとシュプレンガーたちは言う。確かに、平野が言うように神を棄て救済の敵と契約を結んだ妖術師たちの本質は「最悪の異端」であると言えるかもしれない。だが、「魔女がもたらす具体的な害悪が『鉄鎚』に於いては背景に退き、かすんでいた」³⁵と断言できるだろうか。彼女たちによって現実的な被害が起きていることは、重大な問題である。それは悪魔と結託した他の魔術師たちの罪との比較からも垣間見える。

³² S.T.,II-II, q.92-96.

³³ 解雇された司教職に再び就くためにテオフィリウスは悪魔と契約し願いをかなえるが、その後公開と罪の償いの果ての聖母マリアのとりなしにより契約の文書が悪魔から取り返される。

³⁴ Alan Boureau, « Le sabbat et la question scolastique de la personne », *Le sabbat des sorciers (XV^e-XVIII^e siècle)*, sous la direction de Nicole Jacques-Chaquin et Maxime Préaud, Grenoble, Jérôme Millon, 1993, p.34.

³⁵ 平野隆文, 前掲書, p.121. 平野は、『鉄鎚』における妖術師（魔女）を極めて悪質な異端, ボダンの『妖術師の悪魔的狂気』における妖術師を刑事犯であるとした。だが、『鉄鎚』の中でも妖術師は世俗の犯罪者としての側面も有している。それゆえに世俗の裁判所も裁判にかかわるべきだとシュプレンガーらは言うのである。

トマスによる分類を用いて（『神学大全』II-II,q.95,a.3）、シュプレンガーらは第1部の第16問題で、妖術師の罪を他の魔術師や占い師の罪と比較している。14の迷信的行為（実際挙げられているのは16）は、3つの類型から派生しているとされる。この3つのうち、1つめは悪魔への明らかな祈願を含むものであり、2つめと3つめはそれを含まない。1つめの型に属するのは、妖術（幻惑による占い）、夢占い、降霊術、霊媒による占い、地占い、水占い、大気占い、火占い、その他の占いである。2つめは何らかのものの配置や動きを黙して観察するもので、占星術、腸占、前兆占い、予兆占い、手相占い、骨占いがある。3つめものは、人々が何か秘められたことを探求するためにする行為から生ずる事物を観察することに基づく占い（*sortilège*）である。具体的には、溶けた鉛を水に投げ込むことから生じたさまざまな形を見たり、麦わらやさいころを使った「くじ」の行為を観察したりする。

妖術師の術と降霊術は同じく悪魔への明示の請願を行う1つめのグループに属している。とはいえ、降霊術を始めとした他の行為の罪は妖術師の罪の重さとは比較にならないとされる。なぜならば、「それら〔他の魔術や占い〕は、人間や動物や作物を害する目的で行われているのではない」³⁶からだ。つまり、妖術師たちはこの世でさまざまな実害をもたらしているので、単なる占いを通して知識を獲得しようとする降霊術師やその他の占い師よりも格段に罪深いとされたのである。

また、シュプレンガーたちは言う。「妖術師たちの罪は単に宗教的なものではない。〔彼女らによって〕引き起こされる現世での害悪のために、同時に世俗の罪でもある」。つまり「聖俗の混合した犯罪 *le crime mixte* は、両方の裁判所で裁かれねばならない」³⁷。さらに彼らは、妖術師撲滅のためには

³⁶ Henry Institoris et Jaques Sprenger, *op.cit.*, p.245. 『鉄鎚』の英訳のほうには、占いなどのほうは「未来の予知を目的とする」という一句が入っている。

Summers(ed),*op.cit.*, p.82.

³⁷ Henry Institoris et Jaques Sprenger, *op.cit.*, pp.442-443. 妖術師の罪をこのように解釈することにより、教会による自由裁量の可能性を残しながら、妖術師に厳罰を課しやすくなったとヴィダルは述べている。Jacques Vidal, «L'arbitraire des juges d'Eglise en matière de sorcellerie» *Le sabbat des sorciers (XV^e-XVIII^e siècle)*, sous la direction de Nicole Jacques-Chaquin et Maxime Préaud, Grenoble, Jérôme Millon, 1993, p.83.

世俗の裁判所が裁判権を有して裁判をし、死刑の場合は判決を下し、それ以外の罰の場合は身柄を教会裁判所に引き渡すのが良いと主張さえしたのだった。したがって、妖術師たちが異端であっただけではなく世俗の犯罪者でもあったという認識は、後世のボダンのみならず、シュプレンガーにおいてもすでに十分になされていたのである。

2.2 悪魔と女性

『蟻塚』は『鉄鎚』の手引きとなったが、そこでは語られず、『鉄鎚』のみ現れている要素がある。それは、「悪魔と妖術師（女）の性交」である。『蟻塚』においても、人間と性的に交わる夢魔（人間の男性と交わる夢魔はスクブス、女性と交わる夢魔はインクブスと呼ばれる）については論じられていた³⁸。しかし、妖術師たちと悪魔との性交については、ニーダーは沈黙している。

悪魔が夢魔となって人間と交わる理由は、快樂のためではない。なぜなら、彼らは肉も血も持たない霊であるからだ。悪霊たちの目的は、人間の本性を肉体的にも精神的にも損ない、人間をさらにあらゆる悪徳へと向かわせることである。妖術師と悪魔の性交の問題の前に、大前提としてどうして妖術師たちが悪魔を求めるのか、という問題がある。これは、第1部第6問題「どのような事情で魔女たちは悪魔に身をゆだねるのか」において論じられている³⁹。

シュプレンガーたちは、魔術という背信行為が男性よりも女性において見られると言い、これは実際の経験から確認されていることだとする。そしてその理由について考察を加える。ここでもニーダーからの影響が色濃く見られる。もっとも、この種の女性蔑視は当時のエリート層に広くいきわたっていたことはよく知られている⁴⁰。ニーダーやシュプレンガーの発言は、その

³⁸ Jean Nider, *op.cit.*, pp.180-193.

³⁹ Henry Institoris et Jaques Sprenger, *op.cit.*, pp.173-183.

⁴⁰ ジャン・ドリュモエ『恐怖心の歴史』永見文雄, 西澤文昭訳, 新評論, 1997,

ようなコンテクストの中でとらえられるべきものではある。

さて、ニーダーは男装する女性の異端性について述べた章で（『蟻塚』第5巻、第8章、ジャンヌ・ダルクや彼女を模倣した女たちについて書かれている）、女性の邪悪さについて触れている。『鉄鎚』はこの部分をそのまま引きうつしている。そこでは、『シラ書』25：15,16（「蛇の頭よりも恐ろしい頭はない。女のかんしゃくほど始末に負えないものはない。獅子や竜と住む方が、悪妻と暮らすよりましである」、「たちの悪い妻ほど始末に負えないものはない」25：19）、クリュソストモス（『聖マタイ』14）、キケロ（『修辞学』第2巻）、セネカ（『格言集』）からの引用が全く同じ順序で並んでいるのだ。その後は『蟻塚』からの引用ではない女性蔑視の言葉がさらに続き、最後に女性の悪徳が3つに大別されている。すなわち、①不信心、②野心、③肉欲である。そしてこれらのうちで支配的なものが肉欲だとされる。「すべての魔術は肉体の欲望に由来する。これは女性において飽くことを知らない。（...）それゆえ、彼女らは肉欲を満たすために悪魔と羽目をはずすfolâtresなのである」⁴¹。『鉄鎚』は『蟻塚』から邪悪な女性のイメージを引き継いだ上で、そこに肉欲という性的な要素を新たに添加したことがここから読み取れる。

彼女たちは自分たちの汚らわしい肉欲を満足させるのにとどまらず、当世の有力者たちに呪いをかけて、肉欲にのぼせあがらせることで彼らの魂を殺し、そのような行為を誰にも止められないようにしているともシュプレンガーらは言う。権力の中枢にある人物が妖術師の手中に入ってしまうと、誰も妖術師たちに手出しをすることができなくなり、「ここから日々の危機が、とりわけ信仰の絶滅という許し難い危機が生じる。こうして妖術師たちは日に日に増殖しているのだ」⁴²。

「邪悪な肉欲の塊」、これが『鉄鎚』による女性のイメージだと言えよう。邪悪さに関してはニーダーを継承しているが、激しい肉欲を強調している点は『鉄鎚』独自のものである。激しい肉欲をもつ女たちは悪魔とすすんで性交するとされ、その行為によって忌わしさはさらに極められていったのであ

pp567-597.

⁴¹ Henry Institoris et Jaques Sprenger, *op.cit.*, p.182. 「羽目をはずす」とは、性的に交わることを指していると考えられる。

⁴² Henry Institoris et Jaques Sprenger, *op.cit.*, p.183.

る。

2.3 悪魔と妖術師（女）の性交

悪魔と妖術師の性交がどのように行われているかは、第2部第4問題「どのように妖術師たちは夢魔に身を任せるか」において明らかにされている。

まず、肉体を持たない霊である悪魔の体がどのようなものであるかが問題とされる。シュプレンガーらによれば、悪魔は空気のできた体を身に帯びることができるという。とはいえ、空気だけでは何がしかの形をとることはできないので、地上の何らかの物質をそれに結びつけなければならない。こうして、悪魔の見せかけの体を形成している空気は、その性質を保ちながらもある方法で濃縮され、地上のものと接している。

つぎに、このような形状の悪魔がどのように会話し、食事をし、性交をしているのかが考察される。本来、悪魔には肺も舌もない。だが舌に関しては、歯や唇についても同様だが、あるように見せかけることはできる。それゆえに、彼らは正確には話すことができない。だが、彼らには知性があるので、伝達したいことを表現しようとする。その時には、自分の体に含まれている空気の攪乱によって（人間が空気を吸ったり吐いたりするのは違う）、声ではないが声に似たような音を生み出して、鋭く空気を横切って聞き手の耳へ届かせる。食事に関しては、そのプロセスである①口の中でのそしゃく、②胃の中への嚥下、③胃での消化、④必要な栄養の吸収と過剰なものの放出のうち、①と②のみを天使はできるとされる。墮天使である悪魔に関しても、同じ霊という存在なので、同様だと想定されているだろう。

見せかけの体をした悪魔と妖術師が性交することに関して異論の余地はないが、以下の2点を疑う者がおそらくいるだろうとシュプレンガーらは言う。すなわち、①当代の妖術師たちがこのような忌わしい結合を行っているのか、②妖術師たちは自分たちの起源をこの忌まわしい行為にもっているのだろうか。

順序が逆になるが、まず2つめの「悪魔との性交が妖術師たちの起源なのか」という予測される疑問に対する答えを見ていこう。結論から言うと、然

りである。ここでは、アウグスティヌスの「すべての迷信的行為は、人間と悪霊の結合から生じる」（『キリスト教の教え』）という言葉が引かれ、14の迷信的行為のうち魔術が最も悪しきものとされる。なぜなら、魔術は秘められた契約ではなく明確な契約に基づいて行われるからである。「さらに、彼女らは信仰への背教によってラトリア[神のみに捧げるべき崇拜]を悪霊に捧げ、そのうえ、虚しいものに熱中する女の習性に従って、それら[悪霊たち]と最も忌わしい結合をなしている」⁴³。

次に、1つめの疑問「当代の妖術師たちがこのような忌わしい結合をおこなっているか」に対する答えを見ていこう。主が受肉された1400年前から妖術師たちはいたが、記録がないためこの破廉恥な行動に及んでいたかはわからないとシュプレンガーらは述べるが、この行為が当世にも行われていると断言する。

実際、妖術師たちは常に存在したのである。そして彼女らの悪しき行いによって、人間や家畜、大地の実りにとって多くの災害が生じた。また、男夢魔、あるいは女夢魔の悪魔もいた。(…) しかしながら、ひとつ違いがある。過去においては男夢魔となった悪魔は、女性の意志に逆らって彼女たちを襲っていた。ニーダーが『蟻塚』で、トマス（ド・ブラバン）[カンタンプレのトマス、1201-63/72]が『良き宇宙について』あるいは『蜂』で示しているように。だが今日の妖術師たちがこの悪魔的な破廉恥に染まっている立場を明確にしているのは、我々の確信だけではなく、妖術師たち自身の実際の証言がこれを保証しているのであるが、もはや今までのように意に反してしたがうのではなく、自発的に不快で悲惨な隷従に身を置くのである。実際に、我々が処罰のために世俗の腕に委ねた者たちすべては、さまざまな教区で、とりわけコンスタンツやラヴェンスブルクの町において、長年にわたってこの破廉恥行為に耽っていた。ある者たちは30年間、別の者たちは12年、あるいは13年間である。しばしば信仰の全面的否認、あるいは部分的否認がともなっ

⁴³ *ibid.*, p.298.

た。この点に関しては、住民たちが証人である⁴⁴。

かつては意に反して悪魔にレイプされていた妖術師たちが、今や自らの意志で悪魔に身を任すとされている点に注目しておきたい。人が罪を犯す時には悪魔による外からの働きかけがあり、この働きかけに対して妖術師たちは自らの意志により応じていると考えられている。彼女たちは悪しき行いを援助してもらうことと引き換えに、身も心も悪魔に捧げることを誓っている。異端審問官たちにとって、妖術師と悪魔の性交は、この最初の誓いを象徴する行為そのものだったであろう。「彼女〔妖術師〕たちの背教は、実際には人に向って信仰を否定する点にあるのではなく、〔信仰の〕否定に加えて、悪霊ども自体に彼女たちの体を捧げることによって崇拜をしていることによる。ここから、彼女たちの悔悛や信仰への復帰がいかなるものであろうとも、他の異端者たちのように終世の投獄刑を課されるよりも、むしろ死刑が課されるべきである」⁴⁵。そして、妖術師たちの自発性すなわち自由意志による悪魔との結託は、彼女たちへの厳罰を正当化する根拠とされたのである⁴⁶。

おわりに

シュプレンガーたちは、「弁明」の中で次のようなことを言っている⁴⁷。悪魔は絶えず教会に異端者たちというペストをまき散らしてきた。今、残された時が少ないのを知って激怒に燃えた悪魔は、黄昏時の、人間の悪意が増大しているこの世界に「妖術師の異端」という驚くべき異端を増殖させた。この驚くべき異端者である妖術師は悪魔との契約によって、神の許しの下で悪魔の力を借りて人間や家畜や作物に被害を与えている。

⁴⁴ *ibid.*, pp.297-298.

⁴⁵ *ibid.*, pp.235-236.

⁴⁶ 妖術師たちの罪の重大性、彼女たちへの厳罰を訴える『鉄鎚』の論証の仕方については、以下を参照。拙稿「魔女という悪の起源をめぐって——自由意思と神の許し——」『エイコーン』第32号、新世社、2005, pp.107-112.

⁴⁷ Henry Institoris et Jaques Sprenger, *op.cit.*, p.111.

妖術師たちの悪行に関しては、『蟻塚』が豊富な具体例を提供していた。『鉄鎚』はこの遺産を受け継ぎ、妖術師の仕業が現実に行っていることを証明するのに役立っている。妖術師たちがこの世で行っているとされる悪行のリストに関しては、『蟻塚』の時点でほぼ完成を見ていたと言っても過言ではないだろう。すなわち、世俗の犯罪者としての妖術師像は『鉄鎚』の30年前にはすでに出来上がっていたのだ。

異端という宗教上の犯罪者という側面に関してはどうだったか。ニーダーは、妖術師たちが不敬神であり、信仰から外れた者だと記しており、異端のおいをかぎつけてはいた。だが、それ以上追及することはしなかった。シュプレンガーらはこの点を前面に押し出した。救済の敵である悪魔と契約を結び、身も心も悪魔に捧げた妖術師たちは他の異端や背教者よりもひどい最悪の異端者であると定義された。そして、悪魔と妖術師の契約を象徴する行為が両者による性交に他ならない。悪意と肉欲に満ちた女たちと悪魔の性交とは、聖職者たちにどれほどの嫌悪感を催させたことだろう。彼らが妖術師たちの忌わしい肉体を焼き尽くしたいと考えたとしても何ら不思議はない。

また、悪魔と妖術師の性交からは、両者がそれぞれ個の存在どうしとして結びついているというイメージも浮かび上がってくる。悪魔と妖術師は合意の上で互いに手を取り合うのだが、その場はサバトではない。サバトは悪魔崇拝が集団的になされる場である。『鉄鎚』においてサバトの占める位置は取るに足りないものである。ほぼ不在とさえ言える。この点からも、『鉄鎚』の妖術師は悪魔崇拝の秘密結社の一員というよりはむしろ、悪魔と契約した個人としての色彩のほうが強かったのではないかと考えられる。そして、その源泉として悪魔と妖術師の性交が想定されていたのではないだろうか。悪魔の手先となった女たちが同時に大量発生している点に集団性の獲得を指摘する意見もあるが⁴⁸、その根本にあるのが個別の人間の運命、あるいは選びの結果として妖術師が生成されていく仕組みなのである⁴⁹。

悪魔と契約することにより妖術師たちはこの世で人間や動物や作物に被

⁴⁸ 平野隆文, 前掲書, p.57.

⁴⁹ A.ブローは、『鉄鎚』において妖術師は集団を形成しておらず、それぞれ個人の運命だとした。Alan Boureau, «Le sabbat et la question scolastique de la personne», p.35.

害を与える。「異端」という宗教的犯罪者としての側面を『鉄鎚』が強調していることはこれまで見てきたとおりであるが、同時に、妖術師は即物的に罪を犯す世俗の犯罪者でもある。シュプレンガーたちは、聖俗両方の裁判官のために第3部のマニュアルを著した。妖術師が世俗の法廷で大量かつ迅速に裁かれる準備を整えたのは、聖職者である異端審問官たちだったのである。